
何がしたかった御坂美琴！

構田 巧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何がしたかった御坂美琴！

【Nコード】

N1609R

【作者名】

構田 巧

【あらすじ】

白井黒子が部屋へ戻ると、よく分からない内容の御坂美琴の置き手紙が。

とりあえず指定された場所へ行ってみると、そこでは九人のミサカと一人の御坂が自分を待っていて、「本物の御坂がどれか分かるかな」 というゲームを持ちかけられる。

白井は己のプライドにかけ、是が非でも本物を言い当てようとするが……？

(前書き)

どうも、構田巧です。

はじめての投稿と言うことでちょっと緊張しています。

かるく自己紹介をしておく、シリアスが書きたいのに思いつくのはコメディばかりという悲しい二次作家、それが僕です。

感想、評価、その他諸々大歓迎ですので、よろしくお願いします！

風紀委員の仕事が終わり白井黒子がようやく常盤台の自室に戻つてくると、そこに最愛のお姉様の姿はなかった。

代わりに白井のデスクの上に残された置き手紙いわく、

「黒子へ アンタの愛の深さを試させてもらうわ。本物の私を見破れるかしらー？」

ということらしい。

指定された時間は約十分後、場所は近くの公園だった。一体どういふことなのか全く事情がつかめないままとりあえず公園へ移動した白井は、そこで衝撃の光景を目の当たりにする。

「お姉様っ、お姉様がいっぱいっ！」

大して広くもない敷地のなかに、何人かの御坂美琴が横一列に並んでいる。ざっと十人くらいだろうか。

白井が滴るよだれをぬぐいながらへっへっへと不気味な笑いをこぼしている、向こうもこちらに気づいたようだ。

「来ましたね、とミサカ一〇〇三二号は意味もなく事実を述べてみます」

「この中に一人だけ本物の御坂美琴お姉様が紛れ込んでいます、とミサカ一〇〇三三号は説明を始めます」

「あなたは一度だけ回答することができ、」

「見事お姉様を見つけることが出来れば晴れて二人は結ばれるんですのね、とシライ〇〇〇〇一号は鼻息荒くガッツポーズを作りますのぐふっ！」

「黙って話を聞け」

一〇〇三三号さんの裏拳が腹部に叩き込まれた。白井が腹を押さええてうずくまる。

「……続けてくださいですの」

「あなたは一度だけ回答することができ、失敗しても成功しても特に何もありません、とミサカ一〇〇三二号は自分でもびっくりのルールを口にします」

当然白井もびっくりである。てっきり何かごほうび的な、甘い夜のな何かがあるのだと確信していたのだが。つまりはただの暇つぶしなのだろう。

「まあやることは理解しましたわ。ようはお姉様を探し当てればいいのですわね」

白井は一列に並んだ御坂達をざっと見回す。

「まず両端のお二方はあり得ませんわね」

「うわーっ、やっぱり二秒でバレたーっ！　ってミサカはミサカは地団太踏んで悔しがってみたい！」

一番右で背伸びしていた少女……いや幼女が体いっぱい気持ち表現する。

「いや、そりゃバレますわよ。そんなちんまい見た目では……」

「ちんまい？　今あなたちんまいっていったの！？　それはミサカの禁句かも、ってミサカはミサカは腕を組んで憤慨してみる」

「かつ、かわいい……！　『黒子の☆マル秘お姉様アルバム』第三巻二九四ページにある、お姉様（小三バージョン）の写真を切り抜いて命を与えたみたいなの愛くるしさ……！」

「何だか背負ってるオーラが怖い、ってミサカはミサカは本能的に身の危険を察知するけどどこにも逃げ場はないーっ！」

「あの、それよりなぜこのミサカが本物ではないと分かったのか説明して欲しいのですが、とミサカ一〇九〇号は控えめに手をあげ発言します」

白井が今まさに抱きつこうとした時、左端の少女が口を開いた。ちんまいお姉様がほんと安堵のため息をつく。

「なぜってあなた、見たところ本物のお姉様よりウエストが細いですわよ。おそらく指二本分ほど」

ビシィッと、空間に亀裂が走った。一〇〇三二号さんを始め、数

人の御坂がにわかに殺気立つ。

「そうですかそうですね、やはりあの時間き出したダイエット法はダメーでしたか、とミサカ一〇〇三二号は手持ちの武器を確認します」

「道理でいくら試してみても効果が出ないわけです、とミサカ一〇〇三九号は軍用ゴーグルで殴ったらどれ位ダメージがあるか考えながら一九〇九〇号をにらみつけます」

「え……っと、ミサカ一九〇九〇号は急用が出来たのでこれで失礼し」「逃がすかア!!」

三人はドタバタとどこかへ走り去ってしまった。

「……今追いかけていったお二人は本物ではありませんわよね?」

「安心してください、まだこの中にオリジナルは紛れています、とミサカ一〇〇三三号は断言します」

実は結構ピンチだったりする。残った六人の中で、一体誰が本物のお姉様なのか見当もつかないのだ。

白井としては己の誇りにかけて何が何でも正解したいところだが、こいつら六つ子かクローンかよと言いたくなる程うり二つなのでさすがの白井もお手上げだった。

とは言っても万策尽きたわけではなかった。保険のつもりで持ってきたとおきがあるのだ。こんな道具に頼らずとも見破れると思っていたのだが、背に腹は代えられない。

白井はポケットに手を入れると、静かに例のアイテムを取り出した。六人の目の前にかざし、指でつまんで軽く揺らしてみせる。

「お姉様、これが何だかお分かりですわね?」

ゲコ太ストラップだった。

これをちらつかせれば、間違いなくお姉様をあぶり出せるはずである。

「ほーらほら、大事なゲコ太がこんな所に。お姉様、名乗り出てくださいませんか?」

全員の反応を同時にうかがうと、ただひとり一〇〇三三号さんの

様子がおかしかった。

視線を泳がせ不安げな表情だ。おそらくこの人が本物のお姉様だろう。対して他の五人は涼しい顔である。

「早くしないと、ゲコ太がどうなっても知りませんわよう？」

ストラップをもてあそびながら追い打ちをかけると、一〇〇三三号さんはころなしか前かがみになって両手はきつく握りしめ始めた。限界に近そうだ。

「仕方ありませんわね。人質を追加しちゃいますの〜」

トドメとばかりに反対のポケットから取り出したのはピョン子ストラップ。同じく御坂美琴ご執心のカエルのマスコットである。

「！！」

白井黒子は知るはずもない。妹達シスターズの面々もオリジナルと同じくゲコ太に夢中だという事を。

一見冷静に見えた彼女たちでも、心の中ではものすごい葛藤があったのだ。

「「もうやめてエエエエエエ！！」」

人質に負けてしまった六人は一斉に白井へ突撃しゲコ太達を救出するとキュートなカエルを愛でながら帰っていった。

後には誰もいない公園と、かつて白井だったものが残されていた。

(後書き)

僕、基本的に不定期更新です。これからも出没すると思いますので、ちよくちよく読んでやって下さい。

構田巧でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1609r/>

何がしたかった御坂美琴！

2011年8月6日03時33分発行